

Title	元末張士誠政權の興亡
Sub Title	The rise and fall of chang Shi-cheng's (張士誠) administration at the late Yuan period
Author	高橋, 琢二(Takahashi, Takuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.587- 612
JaLC DOI	
Abstract	Chang Shih-cheng was one of the leaders who rose in China toward the end of the Yuan Dynasty. He was born in Taichou, Chiang-su province, which has been always a center of salt industry. Being a member of the crewman of a salt-carrying ship, he carried on an illegal trafic in salt. In 1353, chang formed a rebel army with his comrades, and captured Kao-yu 高郵, Chiang-su province, and the following year he called himself king. In 1356 he captured P'ing-chiang 平江 (Soochow), removed there, and established a kingdom organization. Although he and his men surrendered themselves to the Yuan Government in the following year, in practice they remained as an independent local administrative body. The territory of this administrative body was a wide plain covering both the Chiang-su province and the northern part of Che-chiang province. After removing to P'ing-ching, the administrative body was always in a state of conflict with Chu Yuan-chang 朱元璋. At last in 1367 Chang's army was annihilated by Chu Yuan-chang who afterwards set up the Ming Dynasty. Thus Chu Yuanchang's movement to the unification of China developed further. In this article, the writer describes about the rise and fall of Chang's administration, together with some historical facts concerning the Chang's administration mentioned above.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0591

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元末張士誠政權の興亡

高橋琢二

一、はじめに

元末に張士誠が淮東浙西に割據した。本稿に於て此の割據政權の興亡の過程を辿つてみたい。此の政權の興亡は軍事に終始する。その點は氣持のよい事柄ではないが、「南船」とか「澤國」とかいう言葉が表現する地理的條件の下で軍事がいかなる展開をなしたかを観ることが出来る。その他いろんな見地から、此の史實を觀察することが出来る。暴力團が政權に發達したからと言つて、不思議でも何でもないけれども、此處に、史實として、そう言うことの一つの標本が存する。藝苑方面を見ると、畫筆老熟の倪雲林と青年詩人高青邱が張士誠と時代を同じうして活動しつつあつた。前者は無錫の人、後者は吳（平江）の人である。彼等の郷土は張士誠割據地域内となつた。彼等の活動の環境と時代を解する爲にも、張士誠の事蹟は一應觀らるべきである。それで先ず張士誠に關する文献であるが、明の太祖は張士誠の鬭争の敵手であつたから、「皇明實錄」の「太祖實錄」には張士誠に關することが豊富に現われる。また「元史」の順帝紀、「明史」の太祖紀、「明史藁」の太祖紀、「元史」「明史」「明史藁」の張士誠の興亡に關係のあつた人物の傳に史料の存すること勿論である。宋濂の「宋學士文集」陶宗儀の「輟耕錄」など、同時代人の詩文集隨筆にも史料となるものが

存する。「輟耕錄」中の「紀隆平」は張士誠の事蹟を、その發端から至正十八年八月元に降るところまで書いてある。明の劉辰撰「國初事蹟」一卷に張士誠に關することがらが、多くはないが、散見する。劉辰は明の開國の頃李文忠の幕下にあり、永樂の初「太祖實錄」の纂修に與つた。四庫全書提要は、此の書を、實錄を修める時書進した事略の草本ならんとしている。恐らくそうであろう。箇條書になつてゐる。

張士誠興亡の始末を編録したものに「平吳錄」一卷がある。明の吳寛の編と伝えられてゐる。編者は此の書の末尾に「聞く所の古老の語及び士大夫の記するところを以てし、參ふるに史書載するところを以てし、爲録して以て之を藏す。後世必ず攻する有らん」と識してゐる。太祖實錄から抄出した部分が非常に多い。

張士誠の傳としては、「太祖實錄」の吳元年九月己丑士誠の死を録した條に小傳が載せてあり、「明史」「明史藁」「新元史」の列傳に各傳が立てゝある。

明末の錢謙益編「國初群雄事略」の「周張士誠」には張士誠關係の史料が博採せられており、綜覽し得る。

張士誠の興亡は元の至正年間に終始する。本稿史實の年月は至正の年號を用いて識した。それが便利だからである。

二、時 勢

至正七年には、湖南に於て幾度も獠寇があつた外、國內諸所に盜が起つた。揚子江沿岸に盜が起り忌むところなく剽掠を行つたが、有司が之を禁ずることができなかった。是の年十一月兩淮運使宋文瓚が次の上言を行つてゐる。

江陰・通・泰、江海之門戶、而鎮江・眞州次之。國初設萬戶府、以鎮其地。今戍將非人。致使賊艦往來無常。集慶花

山劫賊、才三十六人。官軍萬數、不能進討、反爲所敗。後竟假手鹽徒、雖能成功、豈不貽笑。宜亟選智勇、以任兵柄、以圖後功。不然東南五省租稅之地、恐非國家之有。（「元史」卷四一）

之に據れば、江陰・通州・泰州・鎮江・眞州に萬戸府が置いてあつたのにもかかわらず、これらの地に賊艦が自由に往來した。集慶（今の南京）の花山に劫賊が現れ、その數わずかに三十六名であつたのに、萬數の官軍が進んで之を討ち得ず、反つて敗れ、やむなく鹽徒の手を假つて功を成したと言うのであるから、是の時元はすでにその治安維持の能力を失つて形骸だけの國家となつていたと言わねばならぬ。翌至正八年には臺州の方國珍が亂を起した。至正十一年は賈魯が河防を修した年であるが、是の年には諸所に亂が起つた。劉福通は潁州を、李二等は徐州を、徐壽輝は汝寧府を陥れた。元末の兵亂は是の年から本格的となる。翌至正十二年に郭子興が濠に兵を起した。是の年李二等は元朝の遣した脱脫の爲に徐州を追われるが、徐壽輝は湖廣・江西に於て多くの州縣を略取する、是の年兩淮も騒動したので、元朝は河南行省の地を析いて淮南江北行省を立て、揚州に治をおき、趙璉を參知政事とした。璉は赴任して、淮安に鎮し、又移つて眞州に鎮した。是の翌至正十三年正月張士誠が亂を起した。

三、起　　兵

張士誠は小字を九四と呼び、泰州白駒場の亭民であつた。泰州は海州・通州（南通）と共に古來著名な產鹽の中心地で、白駒場は鹽場である。士誠には弟が三人あり、士義・士德・士信と曰つた。彼等兄弟は皆舟で鹽を運送することを業とし、縁つて私に鹽の仲買を行つて利を獲ていた。鹽の密賣者即ち鹽徒であつた。鹽徒は暴力逞しく、仲間に地下組

織があつて團結があるのが普通である。士誠は年少の時から膂力があり、無頼であつた。重遲寡言、財を輕んじ施を好んだので、おのずから群輩の心を得た。彼は鹽を諸富家に販つたが、諸富家は彼を易つて毎に陵侮し、或は直を負うて償わなかつた。その取引が專賣品であつた鹽の暗取引であつたからである。弓兵丘義（邱義とある書もある）なるものが尤も屢彼を窘辱した。彼は忿に勝えず、諸弟及び壯士李伯昇等十八人と結んで義並びに平素彼を陵侮する者を殺し、火を縱つてその居を焼いたが、その火は民居數百を延焼した。彼は罪を獲んことを懼れ、兵を起さんことを謀り、近傍の鹽場に入つて若者を招集した。時に至正十三年正月で、彼は三十三歳であつた。彼は衆を率いて掠奪を行いつつ移動した。丁溪に至つた時その地の大姓劉子仁が衆を集めて彼等を拒ぎ戦つた。此の戦闘に於て、彼は部下に多くの損傷を蒙り、弟の士義が矢に中つて死んだ。彼は憤怒し、必ず子仁を滅さんと欲し、遂に決戦して之を破つた。これから彼の兵勢が振つた。當時重役に苦しんでいた此の地方の鹽丁が多く來り屬したので彼は従者萬を超ゆるに至つた。

なお輟耕錄の「紀隆平」に依れば、始め泰州の人王克柔なる者があつて、家富み、施を好み、多く游俠と結んで、將に不軌を爲さんとしたので、高郵の知府李齊が之を獄に收捕したところ、かねてから王克柔の恩に感じていた李華甫と張士誠が相謀つて衆を聚めて獄を刼した。よつて李齊は克柔を揚州の獄に移し、後李華甫と張士誠を招安し華甫を泰州の判となし、士誠を千夫長としたとある。これは士誠起兵以前のこととなるが、これによれば、亂民が官を憚るところなくなつていたこと、士誠が事を舉げる前すでに游俠無頼の徒の間に頭目としての地歩をしめていたことがわかる。

四、高郵に據る

張士誠は勝に乗じて三月泰州を攻めて之を陥れ、此處に據つた。河南行省が兵を遣して彼を討つたが克たず、高郵の知府李齊に命じて往いて招降せしめた。士誠は彼を久しく拘したが、後縦ち歸らしめて降を請い、行省は彼に民職を授ける。士誠は行省の征討に従征して功を立てんことを請う。元は淮南江北行省參知政事趙璉に眞州から移つて泰州に鎮ぜしめた。泰州に移つた趙璉は張士誠に船を治划して濠泗に趨くようながしたところ、士誠は疑憚して發しなかつた。此の頃李二が泰州に於て亂を起したが、元の將納速剌丁が高郵の得勝湖に於て賊の船團を破ると、援を失つて元に降る。すると士誠は李二を殺し、俄に叛して趙璉を殺し、興化を陥れ、得勝湖に寨を結んだ。四月元は萬戸告身を以て彼を招いたが、彼は受けず、五月高郵を取つて之に據つた。高郵は、大運河に沿い、高郵湖を控え、古來淮東の要地である。士誠は次いで應寶を取る。此の頃彼はすでに多くの舟艦を有した。

五、王號と國號

至正十四年正月朔日、彼は自ら誠王と稱し、國號を設けて「大周」と曰い、「天祐」と建元し、曆を「明時」と稱し、官を設け、職を分つた。亂を起してから滿一年後である。

彼の軍は紅巾を用いて標識とした。時人その軍を「紅軍」と呼んだ。

六、元の攻撃

至正十四年彼は元から二度攻撃を受けた。その第一波は石普の來攻、第二波は脱脫の來攻であつた。石普は元の樞密

院都事であつたが、丞相脫脫に見え、高郵は重湖を負い、地皆沮洳で、騎兵を以てしては攻め難い。歩兵三萬を與えられるならば、吾之を保取せんと云つた。よつて脫脫は彼に命じ、山東に於て義兵を招募して高郵を攻めさせる。兵數は約五千であつた。彼は先づ寶應を奪回し、勝に乗じて敵の砦十餘を抜き、進んで高郵の北門を攻めたが、軍敗れ、戦死した。以上は元史忠義傳石普に見ゆるところである。至正十四年の春から夏にかけてのことらしい。同年六月張士誠が揚州に寇し、元の淮南行省平章政事達識帖木兒が兵を率いて之を討つて敗績した。同年九月元朝は脫脫を中書右丞とし、彼に命じて、諸王諸省の軍を總制して張士誠を討たしめる。彼は百萬と號する大軍を總べて南征し、十一月高郵城外に於て大いに張士誠の軍を破り、高郵を圍む。かくて高郵の陷るも旦夕に在りと見ゆるに至り、張士誠は眞に危機に立つたが、是の時突如彼に取つて事態が好轉した。即ち元朝に於て監察御史袁賽音布哈等が脫脫を劾し、爲に順帝は師を老し財を費し寇盜を坐視したとの理由で脫脫の官爵を削る。高郵を圍んでいた元軍は脫脫の兵柄が解かれたので散じ去る。時に至正十四年十二月であつた。張士誠は機に乗じて元兵を撃つて之を破つたので、士誠の兵勢が再び振うに至つた。此の後の彼には元朝の武力は恐畏でなかつた。

七、吳地畧取と王國の體制

至正十五年に於て、淮東は飢饉であつたが、江東は淮東より穀豊かであつた。しかして、平江即ち今の蘇州は、當時中國有數の繁榮なる都市であつた。故に張士誠は平江を略取し、此處を首都としてその王國を經營せんと欲した。彼は、至正十六年正月、弟士德を將とする一軍を派遣する。その兵數は三、四千であつたらしい。此の南征軍は、通州より江

を渡つて福山港に上陸し、此處で掠奪を恣にした後、常熟を陥れ、進んで平江の婁門と齊門に薄る。當時平江に鎮していた江浙行省參政脫寅（脱因）が兵を率いて之を禦いだが敗れ、二月朔日士徳の軍は兩門より入つて平江を陥れた。是の時脫寅は亂兵に殺され、平江路達魯花赤哈散沙（革桑之）、平江路總管貢師泰は遁去した。當時平江は全盛で錢穀甲仗が山積せられてあつたが、これがすべて占領軍の手に歸し、甲第はすべて占領軍將士の奪うところとなつた。かく士徳は微弱な抵抗に會つたのみで、難なく此の古來著名なる都城を占據することができた。彼が平江を陥れると崑山・嘉定・崇明・吳江が相繼いで彼に降り、元帥王與敬が松江に於て叛して彼に降る。士徳はまた常州を圍み、その地の豪俠黃貴甫の内應によつて、難なく之を陥れた。張士誠は常州を改めて毘陵郡となした。

張士誠の吳地略取は二月中に大體以上の程度まで進み、翌三月士誠は高郵から平江に移つた。その時の彼の服御器用は乘輿に擬した。彼は平江に移ると共に、ほぼその王國の體裁と制度とを整えた。國號を大周、年號を天祐、曆を明時と稱したことは、高郵にいた時と同じで、是の時は天祐三年であつた。彼は平江を國都とし、隆平府と改稱した。承天寺の佛像を碎破し、その建物を王宮とし、萬歲閣と號した。中書省を立てて、陰陽術士李行素を丞相、弟士徳を平章、蔣輝を右丞、潘元明を左丞とした。樞密院を立て、その親信するところの徐義・徐志堅に親軍を典らせ、李伯昇に軍事を總べさせ、王敬夫・蔡彥文・葉徳新を參軍とした。弘文館を開いて學士員を置いた。郡・州・縣を置き、その正官を郡に太守、州に通守、縣に尹と稱した。また鎮海萬戶府を太倉に置いた。要するに彼の立てた官制は元の制に倣いその一部を變えたものである。周仁を隆平府大守とした。彼は甚しく聚斂したと言われる。四月趙打虎を遣して湖州を攻めて之を陥れ、改めて吳興郡となした。潘元明が此處に鎮する。六月士誠は嘉興を攻めたが、苗帥にして江浙行省參政に

なつていた楊完者（楊謂勒哲）が苗軍を率いて固く守禦したので、克てなかつた。

八、杭州を攻む

至正十六年七月、張士誠は弟士德をして杭州を攻めさせた。南宋の都であつた此の都城は、當時江浙行省の省治の所在であつた。士德が來り攻めると、行省の平章政事尊達實哩（左答納失里）は戰死し、丞相達識帖木兒は、彼の兵勢を恐れて城を捨てて遁去し、士德は一旦此の城を占據する。しかし、間もなく達識帖木兒は嘉興に在つた苗帥楊完者と羅木營萬戶普賢努とをして各その軍を率いて杭州を攻めさせる。杭州の民は士德の搜括に苦しんでいたので、楊完者等の軍に應じて、皆挺身巷戰した。士德は敗退し、達識帖木兒は杭州を回復する。

九、朱・張の關係の始り

張士誠が高郵から平江に移つたのと同じ月、即ち至正十六年三月、朱元璋（明太祖）が、集慶を取つて之に據り、「集慶路」を「應天府」と改めた。集慶は即ち建康、後の南京である。平江と集慶、即ち蘇州と南京が、地理的に近いことは言うまでもない。兩雄は忽ちその領土の境を接するに至つた。同じ月に、朱元璋は儒士楊憲を使者として、張士誠に書を送つて修交を求めた。その書の要旨は次の通りである。

自分は足下が姑蘇に據つて自ら王となつたことを足下の爲に深く喜ぶものである。今日自分は足下と境を接するに至つた。鄰と睦び國を守り境を保ち民を息するは古人の貴んだ所であつて、自分は甚しくこれを慕う。今後使を遣

して相往來し、交構の言に惑うて邊釁を生ずることがないように致しましょう

張士誠は此の書を得て喜ばず、楊憲を留置し、返書しなかつた。これが張士誠と朱元璋との直接關係の始まりである。此の後の兩者の關係は鬭爭に終始する。

一〇、鎮江攻撃の失敗と常州の喪失

最初の鬭爭は鎮江の攻防であつた。その概略は次の通りである。應天に據つた朱元璋はその月のうちに徐達を遣して鎮江を攻めて之を取つた。鎮江が揚子江と大運河の交點に近く交通上軍略上の要地であることは言うまでもない。張士誠は之を奪取せんと欲し、同じ年の七月舟師を遣して之を攻める。鎮江を守つていた朱元璋の將徐達は來襲の舟師と龍潭に戦つて之を破り、その舟を焚いた。かくて張士誠の鎮江攻撃は失敗に歸した。

朱元璋は、張士誠が鎮江を攻撃したことによつて、張士誠との交が絶えたものと認め、徐達に命じて常州を攻めさせる。常州は大運河に沿ひ、鎮江と平江のほぼ中間にあり城壁を繞らす。しかして大運河によつて兵員を移動できるから、朱元璋にとつては常州を略取しなければ鎮江が安全でない。張士誠の方から見れば、常州を敵に取られると言うことは、首都の眼前に敵襲の根據地ができることで、事態重大である。徐達は常州を圍んだが容易に之を陥れることができなかった。朱元璋は三萬の兵を増援する。

是の年十月張士誠は朱元璋に和を請うた。即ち孫君壽を使者として書を送り、歲に糧二十萬石・黃金五百兩・白金三百斤を輸つて犒軍の資とし、各封疆を守ることゝせば感恩に勝えずと言つた。^(註) 朱元璋は復書して、我が使臣將校を歸し、

餽餉を五十萬石とするならば、常州の師を班すと言つた。士誠報ぜず、和議は成らなかつた。

十一月張士誠は呂珍を常州に遣し拒戦を督せしめたが、翌至正十七年三月、糧食の缺乏が主因で保てなくなり、城が陷る。呂珍は、陷る前、夜に乗じて脱出した。徐達等此の城を攻めること、此處に至るまで九ヶ月であつた。

(註) 此の歲輸の額は太祖實錄・明史張士誠傳・明史藁張士誠傳に據る。平吳錄には「糧十萬石布萬匹金銀等物」とある。

一一、朱元璋に長興を占めらる

徐達が常州を陷れる前月、即ち至正十七年二月、朱元璋は耿炳文に命じて、廣德から進んで長興を略取せしめる。張士誠の將趙打虎が兵三千を以て長興附近に炳文を迎えて戦つたが敗れて湖州に走り、耿文は、長興に在つた元の守將李福安・荅失蠻等を擒にし義兵萬戸蔣毅を降して、長興を取つた。長興は太湖の西南岸に近い所にあり、此處から、歩騎を廣德・宣城・歙州方面に出すことができる。此の要衝が朱元璋の占むところとなつた。

一二、江陰を失う

江陰と江陰よりは上流の揚子江北岸に近い泰興とは、その頃共に張士誠の有するところであつたが、是の年五月朱元璋はその將張鑑、何文政を遣して泰興を攻めて之を取り、その翌六月には趙繼祖を遣して江陰を攻めて之を取つた。江陰が江海の門戸をなす要地であることは申すまでもない。朱元璋は此處に水寨を設ける。かくて揚子江上に朱元璋の勢

力が伸張する。

一三、張士德擒となる

至正十七年七月、張士德が常熟に攻め來つた徐達の前鋒趙德勝と戦つて擒になつた。彼は建康に送られる。朱元璋は彼を降らせようとしたが、彼は降らず、殺される。

彼は士誠の謀主であつた。士誠のとつた元朝に降り、元朝を助として朱元璋に當る策も彼が擒になる以前から樹てゐたものと見られる。彼は勇氣があり、士誠が元の多くの州縣を略取したのも彼の力に依るところが多い。彼を失つたことは士誠に取つて致命的損失であつた。

太祖實錄には、是の前年七月徐達が常州を攻めた時、士德が數萬の兵を率いて常州を援けにゆき、徐達の軍に邀撃せられ猝に落ちて擒となつたとあるが、それが誤であることについては「國初群雄事略」に錢謙益の考證があり、明史徐達傳・明史藁徐達傳にも明史趙德勝傳・明史藁趙德勝傳にも、趙德勝が常熟に於て士德を擒したとある。

一四、士誠元に降る

以上述べた通り、張士誠は朱元璋に次々と要地を略取せられた。此の頃彼はまた嘉興に兵を出して屢楊完者に破られた。形勢かくの如くであつたから、彼は弟士德の勸を容れて、元朝に降を請う。元を助として朱元璋に對抗しようとしたものである。元朝は彼の請を許し、周伯琦を平江に遣して招諭し、至正十七年八月、彼に大尉を、弟士德に平章を、

弟士信に同知行樞密院事を授け、その黨にそれぞれ官を授けた。但し士德は是の時すでに擒せられ死去していた。

封を受けた士誠は萬歲閣から府治に遷った。隆平府はまた平江路となつた。彼は是より元の正朔を奉じたが、錢穀甲兵は依然自由にした。即ちその據つた地域の實權者であつた。言わば彼の地域は元朝の藩となつた。

一五、杭州を勢力下に收む

元の江浙行省丞相達識帖木兒が、一度張士誠の軍に陥れられた杭州を、楊完者の率いる苗軍と普賢努の軍を以て奪回したことはすでに述べたが、その後、楊完者は陽には達識帖木兒に尊事したが、生殺與奪を自ら決し、達識帖木兒は僅に成案に署するのみとなつた。また完者はすでに親王と許嫁になつていた平章政事慶童の女を強いて娶つた。達識帖木兒は此の婚を主したが甚しく之を厭つた。是の時張士誠はすでに元に降つていたが、彼は楊完者を圖る志があつた。かくて達識帖木兒と張士誠との間に楊完者を除く計が陰に成立し、その計に従つて、至正十八年八月、士誠の兵が杭州城北に在つた楊完者の營を圍む。完者は力戦したが、軍潰えて自經して死ぬ。士誠の兵はまた楊完者の部將宋興が守つていた嘉興を攻めて之を降す。是から張士誠の兵が杭州と嘉興に據る。かくて約九十年前まで南宋の都であつた大都市杭州は嘉興と共に事實上張氏の有に歸した。

一六、士誠宜興を失う

朱元璋は至正十八年十月その將徐達邵榮を遣して宜興を略取した。宜興は太湖の西岸に近い城邑で、すでに士誠の兵

が據つていたものである。士誠は宜興を喪失したが、是の時その將呂珍が、朱元璋の將廖永安の率いる舟師と太湖で戦つて、廖永安を擒にした。士誠は永安の才勇を愛し、之を降らせようとしたが、永安は屈せず、囚せられること八年にして死去した。

一七、士誠紹興に駐兵す

至正十八年十月、張士誠は將を遣して紹興を守らせた。彼の兵は一時それより更に南の諸暨に駐したが、大體紹興が彼の領域の南至である。

一八、浙東の爭奪

至正十八年から至正二十五年に至る間、朱元璋と張士誠の間に浙東の爭奪戦が展開せられた。概略次の通りである。至正十八年十月兵を遣して紹興を守らせた張士誠は、その年のうちに兵を遣して更にその西南の諸暨を守らしめたが、その翌年正月になると、朱元璋の將胡大海が士誠の守兵を追つて之を取る。かくて諸暨は朱元璋の有に歸した。朱元璋は諸暨を諸全州に改める。是より先朱元璋は建徳を取り、改めて嚴州となしたが、是の年、即ち至正十九年、張士誠の兵が兩度之を攻め、兩度とも朱文忠に破られて退く。至正二十三年の春、士誠は弟士信を遣し、兵萬餘を率いて諸全を圍ましめる。時に諸全は朱元璋の將謝再興の守るところであつた。再興はよく防戦し、士信の兵を破つたが、士信が攻圍軍に増兵すると、急を朱文忠に告げる。時に朱文忠は朱元璋の浙東行省左丞を以て嚴・衢・信・處・諸全の軍事を總

制していた。彼は胡德濟を遣して往援せしめ、かくて胡・謝力を併せて士信の軍を却ける。翌二十四年になると、その謝再興が諸全の軍馬を率いて呂珍の守つていた紹興に走り、士誠に降つた。再興に朱元璋を恨むところがあつた爲である。是の年朱文忠は諸全を去ること五十里の地に一城を築き、新舊兩城相犄角することにした。翌至正二十五年、張士信は李伯昇を遣し、二十萬と號する兵を率いて、降將謝再興を挾んで諸全の新城を攻めしめた。新城の守將胡得濟は壁を堅うして拒守し、朱文忠が諸將を率いて來り、伯昇の軍を撃つ。文忠は國家のこと此の一舉にありと、決死以て戰に臨む。戰の結果、伯昇が敗れて遁れ、士誠の同僉韓謙が捕えられる。要するに此の戰は浙東に於ける朱・張兩勢力の決戰であつた。しかして張が敗退した。

一九、杭州の修城

元は宋を亡ぼした後國內に修城を禁止したので、杭州の城も修理せられず、日に居民の取毀つところとなつた。張士信は、杭州は重鎮で要衝の地であるからと言つて、士誠と相談の上、至正十九年、此處に築城する。此の築城は姑蘇・吳興・嘉興・松江の四郡外一州兩縣の民夫の徭役によつた。是の年七月に經始し、十月に完成した。民夫は糧を裹んで遠役せねばならなかつた。浙江通誌に收むる時人貢師泰の「杭州新城碑」文に據れば、新城は、鳳山を外にし、市河を内にし、周六萬四千二百尺、高さ三十尺、厚さ四十尺、百餘步毎に方臺を設けて矢石に便した。城門は十三。城の内側に二百步毎に磴道を設けて人馬を上下した。また重壕を塹し、飛梁を懸けた。

築城の竣工は至正十九年十月であるが、同じ年の十二月、朱元璋は常遇春に命じて杭州を攻めさせた。遇春は翌年三

月まで之を攻めたが、屢利を失い、下すことを得なかつたので、朱元璋は三月遇春を召還した。張士信は築城によつて杭州守禦に成功したと言わねばならぬ。是の時、杭州は城門を閉すこと三月餘、城中食盡き、饑死する者十人に六七人であつたと言う。慘事と言はねばならぬ。

二〇、漕 貢

中原亂れて以來、江南の海漕久しく通ぜず、大都が糧食の不足に苦しんだので、至正十九年九月、元朝は兵部尙書伯顏帖木兒戸部尙書曹履亨を平江に遣し、張士誠に御酒と龍衣とを賜わつて漕貢を徴した。士誠は詔命に應じて糧十一萬石を貢した。此の糧は翌至正二十年四月大都に着いた。彼は是の後至正二十一年に十一萬石、至正二十二年と至正二十三年に各十三萬石を貢した。以上の糧を大都に海漕したものは方國珍で、當時國珍は元朝に降りその海道運糧萬戸の官を帯びていた。張士誠は、至正二十三年に元朝に王に封ぜられんことを請うたが、元朝がこれに報じなかつたので、是の年の貢を最後として、その漕貢を絶つた。

二一、朱元璋勢力の伸張

至正十九年に於て朱元璋は揚州・鎮江・廣德・長興・常州・寧國・江陰・常熟・徽州・池州・建德路・婺州・諸全・衢州・處州を領有した。即ち北は揚州から南は甌江の中流域に及ぶ一帯の地である。

至正二十年閏五月陳友諒がその主徐壽輝を弑して自立し、皇帝と稱し、國を漢と號した。その領土は湖廣・江西に跨り、

朱元璋の領土の西に横わる。是年から張士誠・朱元璋・陳友諒の三勢力が並立した。張士誠と陳友諒とが通謀して中間の朱元璋の本據建康を合攻せんとしたこともある。然るに朱元璋は至正二十三年秋著名なる鄱陽湖の戦によつて陳友諒を仆し、戦後その領土を盡く併せたので、こゝに張・朱二大勢力對立の形勢を現成した。

二二、西湖書院藏版の補刻

張士信は、至正十九年、以前から西湖書院にあつた書庫を一新した。また至正二十一、二年に同書院に藏する經史書版の兵後零落したものを補刻した。

二三、史椿の叛

至正二十二年、士誠の部將にして、淮安を守つていた史椿が、使者を金陵に遣して、朱元璋に書を送つて歸屬を請い、朱は使者を遣して之に報じた。此のことは忽ち士誠の覺るところとなり、士誠は椿を執えて殺した。史椿の叛した理由は、彼が士誠の諸將の驕侈なる見、張を以て事を共にするに足らずとなしたによる。また徐義が史椿を讒毀したによると言われる。史椿は士德と共に嘗ては士誠の謀主であつた。史椿と謀を共にした元の淮南行省左丞汪同も亦同時に執えられ殺された。

二四、士誠自立して呉王となる

至正二十二年秋、張士誠はその部屬をして己の功德を頌せしめて王爵を求めた。江浙行省丞相達識帖木兒は、士誠の意に逆えば、忽ち害せられるので、文書を爲つて、再三朝に封王を請うたが、元朝は報じなかつた。九月、士誠は遂に自立して吳王となつた。彼は城内に宮室を治め、官屬を置き、その母曹氏を尊んで王太妃とした。是の後の三年間が彼の極盛期である。至正二十五年朱元璋が淮東作戦を開始する前に於ける張士誠の疆域は、北は徐州を踰えて濟寧の金溝に達し、南は紹興に至り、南北二千餘里であつた。徐州・宿州・泗州・濠州・安豐の諸郡も皆彼の據るところであつた。

二五、安豐の師

至正十九年八月以來劉福通が韓林兒を奉じて、安豐に據つていた。至正二十三年二月、張士誠は、その將呂珍を遣して安豐を攻めた。劉福通は急を朱元璋に報じて救を求める。朱元璋は安豐が破れば張士誠の勢力が増すと考え、翌三月徐達常遇春等を率い、親ら救援に赴く。彼等が安豐に到つた時は、呂珍はすでに城に入り、劉福通を殺していた。呂珍は來攻の朱元璋と戦つて敗れ、退去する。朱元璋は此の戦の後韓林兒を滁州に遷した。しかして安豐はまた張氏の有に歸した。

二六、士信江浙行省左丞相となる

張士誠は、至正二十四年八月、弟士信を杭州に遣し江浙行省左丞相達識帖木兒に逼つて行省の符印を取り、達識帖木

兒を嘉興に徙して幽し、士信を江浙行省左丞相とした。之を聞いた元朝は士信を正式に此の官とした。當時元の江南行臺が紹興に在った。士誠は人を紹興に遣して御史大夫普化帖木兒に迫つて行臺の印章の引渡しを求めたが、普化帖木兒は應ぜず、服毒して死ぬ。數日の後、達識帖木兒が之を聞き、彼も亦藥酒を飲んで死んだ。さて士信は杭州東城下に第宅を建て、「丞相府」と號して之に居つたが、久しからずして、潘元明に杭州を守らせておいて、自らは平江に還つた。

二七、白茆を塹す

太湖には七十三瀨と稱せられるその水の來源がある。流出は吳湖江・婁江・白茆河・七鴉浦に由るが、此等はいずれもその流が小さい。故に太湖は屢漲溢して水患を起す。元の泰定年間周文英の奏記に、水勢の趨くところ、宜しく専ら白茆・婁江を治むべしとあつたが、時人は之を省みなかつた。張士誠は故牘を閲して文英の書を得、至正二十四年冬兵民の夫十萬を使役して白茆を塹して港となした。此の場合の港は堀川と言うほどの意味である。此の港は、長さ九十里、廣さ三十六丈、その功を督したものは呂珍であつた。民此の工事の勞を憚り、時人民の言を采つて「白茆謠」を作つた。しかし工成つて民の受けた利益は大であつた。もつとも之によつて太湖による水患が全く解決せられたのではなく、太湖水患對策は民國となつても、まだ問題であつた。

八二、敗 亡

陳友諒を仆し、その領土を併すことに成功した朱元璋は、その志す中國統一の次の段階として、張士誠を討たんと欲

し、至正二十五年十月その征戦を開始した。先ず敵の肘翼を剪り、然る後その本據を衝くというのが、彼が張士誠征伐戦に於て取つた一貫せる戦略である。彼は張士誠の領土のうち、先ずその揚子江以北を取らんと欲した。此の地域は、その廣袤に於て、張士誠の全領土の過半を占める。

十月十七日、徐達・常遇春・胡廷瑞・馮國勝・華高等を將とし、馬軍・歩軍・舟師から成る征討軍が建康の江口を發した。此の軍は、途中河を浚えて舟師を通じ、淮安の壩上に駐し、進んで泰州を圍む。泰州は張士誠が起兵後最初に據つた地である。是の時はその將嚴再興が之を守つていた。張士誠は直ちに援軍を送つたが徐達の破るところとなつた。徐達は嚴再興に降服を勸告した。嚴再興は之に應ぜず、拒守したが、翌閏十月遂に城陥り、虜となつた。

至正二十五年十一月張士誠は兵を派して朱元璋の領土の宜興を攻めた。宜興は太湖の西岸に近いところにあり、これを攻撃することは朱元璋の淮東作戰を牽制することになる。是の時徐達は泰州に在つたが、朱元璋は泰州は別將をして之を守らしめ、馮國勝をして高郵を圍ましめ、常遇春に海安を守らせ、しかして徐達に宜興を援けさせた。達は精兵を率いて南下し、揚子江を渡り、宜興城下に士誠の軍を破り、その兵三千を虜にした。かくて張士誠の企圖は破れ、達は兵を還して高郵を攻める。

朱元璋が江陰に水寨を置いたことはすでに述べた。此の頃康茂才に之を守らせてあつた。即ち此處を要塞として、揚子江上を制せんと欲したのである。張士誠は、朱元璋が淮東に兵を出すと、自ら舟師四百艘を以て大江に出で、范蔡港に駐して、江流を浜る態勢をとつた。至正二十六年正月、朱元璋は江陰の水寨の守將康茂才から、張士誠が舟師を率いて君山に駐し、馬默沙から兵を出して江陰を窺うとの報告を受け、自ら水軍及び馬歩軍を督して救援に赴く。彼が鎮江

に到つた時、士誠の軍が瓜洲を焚き西津を掠して遁れたので、彼は一軍を江陰の山麓に伏せると共に、康茂才に命じて遁げる敵を追わしめた。茂才は敵を追つて浮子門に至つた時、敵の船五百餘艘が潮に乗じて薄つて來るのに遭遇し、力戦して之を破り、敵の將校四百餘人卒五千餘人を虜にし、樓船三十餘艘・斗船十八艘と多數の巨艦とを鹵獲した。かくて此の水戦は張士誠の慘敗となつた。此の結果朱元璋の水軍力は江湖を制壓した。「南船」地域において江湖を制壓するということは、その地域を制壓するということにちかい。張士誠敗亡の運命を決定的としたものは、實に此の水戦であつた。是の後張士誠は淮東に兵を出すには東方海路に由らねばならなかつた。

徐達が宜興を援けに南下していた間、馮國勝が高郵攻圍の軍を統べた。時に高郵の守將は俞某であつたが、彼詐つて降り、國勝之を信じて、指揮康泰を遣して、兵數百を率いて先ず城に入らしめた。その時俞が城樓上に於て、急に閘板を放下して門を閉じ、康泰等を盡く殺した。此の事件は朱元璋と馮國勝を怒らしめた。朱元璋は攻圍軍を増強する。徐達が宜興から歸ると、彼が往攻を督する。至正二十六年三月、國勝はその軍士をして四方から一齊に城に登らしめ、遂に城を陥れた。俞は擒にせられ、戮せられる。

朱元璋は徐達に命じ進んで淮安を取らせる。四月、達は兵を進めて淮安に至り、徐義の軍が馬驪港に在るを聞知して之を夜襲する。義は敗れて逃れ、海路還り去つた。義は高郵を援ける爲めに海路馬驪港に來ていたものである。徐達の軍が淮安の城下に薄ると、守將梅思祖・唐英・蕭成が軍馬府庫を籍して出で降る。次いで徐達は興化を攻めて之を取る。

以上で朱元璋の淮東平定が完了した。作戦の開始から、是に至るまで半歳である。淮東は、張士誠に取つては、生れ育ち事を擧げた記念すべき地である。今や彼はこれを喪失した。彼の衰運が顯著となつて來た。

濠州は、朱元璋の故郷であり、郭子興が據つた地であるが、その後李濟が之に據り張士誠に屬していた。朱元璋は、左相國李善長が李濟と同宗であり、郷里を同じうするという關係があるところから、至正二十五年十一月李善長に命じて、書を送つて李濟を招かしめたが、李濟は應じなかつた。至正二十六年三月朱元璋は韓政、顧時等に命じて濠州を攻めさせる。翌四月李濟は城を以て降つた。

至正二十六年八月、朱元璋は徐達を大將軍、常遇春を副將軍として浙西攻略の師を出した。その師は約二十萬と稱せられた。達等は之を領率して、建康の龍江で舟に乗つて揚子江を下り、京口から大運河を南進、毘陵から右折して別の水路に由つて太湖に入り、湖州に向つた。湖州の港口に於て張士誠の兵との間に戦端が開かれ、徐達等は士誠の兵を破つて進んで毗山に上陸し、湖州城に迫つた。湖州城は張士誠の左丞張天驕の守るところで、天驕は徐達の軍を城外に於て拒がんとしたが成らず、兵を斂めて城中に退く。張士誠は李伯昇を遣して天驕を援けしめる。伯昇は荻港より城中に潛入、天驕と城門を閉ぢて拒守した。張士誠は朱暉・王晟・戴茂・呂珍・李茂及び士誠の養子で五太子と稱せられる者を遣し、六萬の兵を率いて往いて湖州を援けしめた。此援軍は湖州城東の舊館に達し、此處に五寨を築いて之に據る。之に對し、徐達は姑嫂橋に十壘を連ね築き、兵を分つて之に據らせ、舊館の軍の城中の軍に對する援を絶つた。來援した士誠の軍中の李茂は敵し得ないと見て遁去する。徐達は河港を填塞して敵の糧道を絶つた。張士誠は、事急と見て、自身兵を率いて來り援けたが、徐達と阜林の野に戦つて敗れた。九月士誠は徐志堅を遣し、輕舟を以て姑嫂橋を攻めようとしたが、此の軍は常遇春に破られ、徐士堅は擒になつた。これより士誠は甚しく懼れた。是の月常遇春はまた平望に於て徐義・潘元紹の率いる赤龍船を焚いた。此の時船中に在つた軍資機械が一時に俱に盡き、衆軍散走した。これより湖州

城・舊館共に兵援絶え饋餉繼かず、全く孤立した。かくて戴茂・王晟先づ降り、十月朱暹・呂珍及び五太子が舊館を以て降る。間もなく十一月張天驕が湖州城を以て降り、李伯昇も亦降つた。即ち張士誠は湖州と共に多くの宿將を失つた。

徐達が湖州を攻めつゝあつた至正二十六年九月朱元璋は別に李文忠に杭州攻略を命じた。文忠は同月出征、十月桐廬を降し、富陽に克ち、十一月杭州に迫つた。杭州は張士誠の平章潘元明の守るところであつたが、彼は李文忠の軍が杭州に達するに先ち出で降つた。この時彼が齎した款狀即ち降服文書の文は太祖實錄に收録せられている。彼は杭州の土地人民諸司馬軍錢糧と張士誠授くところの浙江行省印及び樞密院浙西江東兩道廉訪司印を献ずる。朱元璋は彼の降を許して彼と彼の部下の官員とをして皆そのまゝ其の職に在らしめた。かくの如くにして此の時より百年前まで南宋の首府であり、當時の中國屈指の大都會であつた杭州は平穩裡に朱元璋に歸屬した。

潘元明は泰州の人、鹽徒で、最初から張士誠とことを共にし、士誠が高郵で元兵に圍まれ、一味十八人と圍を突いて脱出した時には、そのうちの一人であつた。是に至つて朱元璋に降り、以後彼に臣事すること十數年、明の「署雲南布政司事」の官に在つて死んだ。

湖州杭州が敵に降つたことによつて、張士誠はその肘翼を失い、本據平江が孤立した。

潘元明の降伏に次いで、士誠の同僉李思忠・總管衡良佐が紹興を以て降り、敵將華雲龍に攻められて嘉興の守臣宋興が城を以て降る。海寧州も亦敵に降つた。

湖州を降した徐達はその月兵を率いて平江即ち姑蘇に向い、途に南潯・吳江を降し、姑蘇城南鱸魚口に至つて、士誠の將竇義を撃つて之を走らせた。また康茂才は尹山橋に於て張士誠の兵を破り、その戰艦多數を焚いた。徐達は軍を進め

て姑蘇城を圍む。即ち徐達自身は葑門に、常遇春は虎邱に、郭子興は婁門に、華雲龍は胥門に、湯和は閶門に、王弼は盤門に、張溫は西門に、康茂才は北門に、耿秉文は城の東北に、仇成は城の西南に、何文輝は城の西北に陣した。これによつて朱元璋に屬した知名の將は殆んど全部此の攻圍に参加したことがわかる。

彼等は城を繞つて長圍を築いた。城中の佛寺に對して木塔を架した。三層の臺を築いて城中を瞰せるようにし、之を敵樓と名け、每層に弓・弩・火銃を備えた。襄陽礮を設けて城中を撃ち、爲に城中震恐した。攻城の備はかくの如きものであつたが、城堅くして、容易に破れなかつた。

至正二十七年五月朔日朱先璋は張士誠に書を送つて降服を勧告し、概略次のように言つた。

「王莽の亡び隋の國を失うに當り、豪傑時に乗じて蠱起し、王業を圖り土地に據つたが、その定まるや必ず一に歸した。天命の在るところは紛然たるべくもない。智者も事成らなければ當然のこととして心を革め天を畏れ民に順い、以て身を全うし族を保つであらう。漢の竇融宋の錢俶の若きが是である。爾も能く順附すれば、その福餘り有るであらう。孤城を困守してその兵民を危うし、自ら滅亡を取つて天下の笑とならないように」

しかし張士誠は降らなかつた。

六月徐義と潘元紹が城を出でて常遇春と戦い、士誠も出でて之を援けたが大敗し、命からがら城に還つた。先に湖州に於て敵に降り、是の時敵陣にあつた李伯昇は事態すでに急迫すと見て、張士誠を救はんと欲し、客を彼のところに遣して降服を勸説せしめた。客は士誠に會つて、天數はいかんとも致しがたいものであること、勢極まつて變が中より起らば死せんと欲して死するを得ず、生きて歸するところなきに至るであらうこと、今降ればなお萬戸侯たることができ

ることを説いて降服を勧めた。士誠は聽いて熟思したが、遂に降らなかつた。

六月士誠は兵を率いて胥門より突出し、常遇春の軍と戦つたが、その兵がすこしく却いた時、城樓の上で督戦していた張士信が兵疲ると見て金を鳴らして兵を収めたので、敵の乗ずるところとなり、大敗した。士誠が城を出でて戦つたのはこれが最後であつた。

張士信が飛礮に中つて死ぬ。

朱元璋に叛して張士誠に降り城中にいた熊天瑞が飛礮を作することを教え、士誠の方でも飛礮を作つて敵を撃ち多く敵を傷けた。その材料たる木石が盡きると、祠廟民居を取壊して之を材料とした。

九月八日徐達が將士を督して葑門を破り、常遇春も亦闔門の新寨を破つて城下に薄る。張士誠の樞密唐傑は城に登つて拒戦したが、敵せずと見て兵を投じて敵に降り、次いで周仁・徐義・潘元紹・錢輔も降る。夕方攻圍軍が城に蟻附して登り、城遂に破れた。士誠は副樞密劉毅に命じて餘兵を収めさせたところ、なお二三萬人あつたので親ら之を率いて萬壽寺の東街に戦つたが敗れ、毅は敵に降り、彼は倉皇として歸つた。是の時徐達が士誠に降服するよう諭すために、李伯昇を遣した。士誠は閉戸して自經する。日はすでに暮れていた。伯昇は戸を決して入り、降將趙世雄をして抱解せしめたところ、士誠は氣末だ絶せず、蘇生した。徐達はまた潘元紹をして士誠に降るよう理を以て曉させた。元紹は反覆數四曉したが、士誠は瞑目して何も言わなかつた。彼は舟で建康に送られる。朱元璋は最後まで彼の生を全うしようとしたが、彼は自經して死んだ。年四十七歳。朱元璋は棺を具えて葬らせた。士誠兵を起してから茲に至るまで凡て十四年。

朱元璋は「平江路」を「蘇州府」に改めた。

平江が陥るまでに張士誠の領土の諸城は殆んど全部朱元璋に降り、ただ通州（南通）と無錫とが残っていたが、これも相次いで降り、茲に張士誠の王國『吳』は完全に滅亡した。李行素・徐義・左丞饒介・右丞潘元紹・内史陳基その他夥しい數の官人や將士が捕えられて建康に送られる。熊天瑞が殺さる。

徐達以下朱元璋の征討軍將士は建康に凱旋し、朱元璋は論功行賞を行う。

二九、士誠等の人物・敗因

張士誠は、重遲寡言、どつしりとしてもものに動ぜず、寛仁にして部下の推服するところであつたらしい。彼は確に統領の材であつた。しかし政治家軍人としての彼は到底朱元璋の敵でなかつた。朱元璋はその事業に精勵したが、張士誠は酣歌逸樂に時を費すことが多かつた。小成に安んじた感がある。

張士誠の弟士德は智勇があり、士誠の爲に謀主となつていた。士誠が元の多くの州縣を陥れて、その領土を擴張したのは、士德の力によるものが多かつた。彼の存在は朱元璋にとつて恐懼であつた。ところが彼は早く至正十七年七月常州に於て擒になつたことはすでに述べた通りである。

士誠の末弟士信は凡庸であつた。

士誠の諸將は驕侈なる者が多かつた。

王敬夫・蔡彥文・葉德新の三人は、いづれも參軍で、張士誠の下にあつて事を用いたが、いづれも迂濶な書生で大計を知らなかつた。

張士誠のスタッフの貧弱であつたのに引換え、朱元璋のそれは多士濟々で、徐達・常遇春始め多くの有能な將帥を有した。これは結局朱元璋の人物がすぐれていたことに基く。かく觀て來ると張士誠政權の敗亡は必至の成行であつたと言はねばならぬ。

(終り)